人々の幸願ひつつ国の内
めぐりきたりて十五年経つ

皇居内にて天皇、皇后両陛下

歌会始御製　御題「幸」

目次

朝夕に感謝と祈り　栃木県神社庁庁長　吉田　健彦　……1

―新装なる―
神社庁神殿竣工　栃木県神社庁祭式講師　提箸　克之　……2

遷宮こそ日本人の心を
永遠に継承させる唯一の道である　栃木県神社総代連合会長　塚本美代次　……5

―対談―
鎮守の杜コンサートを開催
神社は感謝を再認識する場　歌手　原田　真二　栃木県神社庁庁長　吉田　健彦　……6

第六十二回
神宮式年遷宮祭典と行事　……14

神棚のまつり方　……17

栃木県女子神職会発会に寄せて　……18
一瓶塚稲荷神社　安蘇谷章子
間々田八幡宮　栗原　宏子
八坂神社　葭田　容子
智賀都神社　外鯨　泰子

男体山登拝今昔　……20
栃木県埋蔵文化センター　篠原　祐一

神の使い　古峯ケ原の天狗　……22
古峯神社宮司　石原　敬士

喪中の時の正しい神棚のまつり方　……24

大麻を御飾りすると言う意味　……25
外鯨　泰子

編集後記

■表紙題字
日光二荒山神社宮司　吉田　健彦

朝夕に感謝と祈り

栃木県神社庁
庁長　吉田健彦

日露戦争から今年は、丁度百年を迎えました。来年は、今次世界大戦の集結より六十年を迎えますが、この一世紀の歩みの中で終戦を境に、我が国の精神文化は大きく変貌を遂げました。そのなかで、特に教育が及ぼした影響は計り知れない。今日の社会の混乱と歪みを齎し、その社会環境の変化が、人々の生活に不安感を増幅させています。現在の生活に誰しもが安んじ、妥協してはいないだろう。しかしながら、豊饒の生活環境の中で、心が貧困に陥っている事に、誰れしも気がついていないのではないでしょうか。人や物に対しての敬愛と感謝、慈しむ心が、知らず知らずのうちに蝕まれ、反面心の貧しさのみが独り歩きをしています。或る日、電車の車内での光景の一コマでありますが、電車の中で熟年の紳士が高校生ぐらいの女の子にバックを網棚に上げるよう注意したが彼女は「混んでいるのだからしょうがないでしょ」「混んでいるから上げるのだ、それが最低限のマナーだ」と声を荒げましたが、彼女は頑として応じなかったとのコラムを目にし慄然たる思いでありました。日本人が戦後失った、人に親切にする心をどうにか取り戻したいものです。

この様な、子達の意識調査が発表され、日の出、日の入りを一回も見た事がない子が、約五十二％もありました。自然に対する日常の実感が不夜城の都市化により段々失われている現況ではとの思いがします。しかし、自然と人間の営みは共存するものでありますが、現在社会の人々の生活リズムが異なってきており、関心を示さない世代が多くなってきたようであります。そんな折、童心に返り「夕焼け・小焼けで日が暮れて…」の童謡がふと頭の中を過ぎます。誰れしも子供は夕方になれば我が家に急ぐ、遊びに夢中になって遅くなると親に叱られる。そんな事が、子供達の心にしっかりうえつけられていました。

今、子供の中で親達の享楽のために犠牲を強いられています。昔より我々の祖先は太陽の恵みに感謝し、夕陽が山々に沈む荘厳な輝きの姿に心を動かされ、夕日に限りない清浄の思いをこめ脈々と今日まで受継がれて来ています。しかしながら、子達が日の出や夕日に対しての関心を示さない現実、生活の営みの中朝日や夕日に自然に手を合わせる祈りの心を喚起させる環境整備が我々に求められています。

ある先生が目の前に立ち昇る入道雲に何を連想するかとの問いに中学生は動物や植物等の月並な答えでありましたが、その中に「まるで自分の心のようだ」とつぶやいた生徒がいたそうです。この生徒の夢を今壊していないか。社会の変化は雲の如く、夕日や朝日は星空と同じように自然の偉大さを子供達に教え問いかけています。地域の子供達に自然のありがたさを話してもらいたいものです。

鎮守の祭りは、その地域の氏子意識の連帯感を強め、鎮守の杜から元気な声が響いて来る祭りの季節を迎えます。

新装なる

神社庁神殿竣工

栃木県神社庁祭式講師　提　箸　克　之

栃木県神社庁が、昭和五十一年に宇都宮市塙田町より、現在の八幡台に移って以来、約三十年を経て今日に至っています。

今般、神社庁庁舎の改修事業の実施が決議され、まず庁舎神殿の改修工事を着手することになりました。本工事の施工に当っては、

一、天照皇大神を主神として、天神地祇八百万神を奉斎する神殿。特に内陣の神座、神霊の鎮まり坐す御座でありますので祭祀の本義に基づく神社建築を施すこと。

一、大祭（神宮大麻・暦頒布始祭）をはじめ諸祭典の奉仕並びに神社庁諸行事等に相応しい祭場とすること。

を考慮し、設計にあたりました。この度、神殿が立派に香芳しく新装し、めでたく竣工の運びとなり、この工事に伴う諸祭典（別記）が厳粛に斎行されました。

このことは、本県神社関係者として神社神道を宣布し、祭祀を執行し、教化育成して、神社の興隆のため大いに資することは勿論のことと存じます。また、神社の歩みの中でも、たいへん素晴らしい事業であり、ご関係の皆様とともに慶びを分かち合いたいと思います。

この遷座祭に先立ちまして、左記の通り祭典が行われました。

平成十五年十月十五日
仮殿遷座祭斎行　奉仕員

斎　主　栃木県神社庁
　　副庁長　助川　通泰
祭　員　栃木県神社庁
　　主　事　堀口　邦夫
祭　員　栃木県神社庁
　　嘱　託　國友　晃昭
案内所役　栃木県神社庁
　　参　事　長倉　樹

平成十六年二月十九日
本殿清祓斎行　奉仕員

斎　主　栃木県神社庁祭式講師
　　提箸　克之
祭　員　栃木県神社庁祭式講師
　　斎藤　芳史
祭　員　栃木県神社庁祭式助教
　　柳田　文司

栃木県神社庁
本殿遷座祭祝詞

掛けまくも恐き栃木県神社庁神殿の大前に栃木県神社庁長吉田健彦恐み恐みも白さく

大神の天の御蔭日の御蔭と隠り坐さむ端の御殿を改造り仕奉らむと関係深き諸人等心を合わせ力を一に勤み労きて最も清く美しく仕奉り畢へぬるに依りて今日の吉日の吉辰に還り鎮まり坐さむ是を以ろて斎まはり清まはりて大前に献奉る御食御酒を始めて海川山野の種々の味物を机代に置足らはして称辞竟奉る状を平らけく安らけく聞食して今より将来此の大宮を静宮の常宮と御心平穏に鎮まり坐して天皇の大御代を手長の御代の厳御代と堅磐に常磐に斎奉り幸奉り給ひ栃木県の御氏子崇敬者を始めて天下四方の国民に至るまで大神の広き厚き恩頼を弥遠永に蒙らしめ給ひ各も各も負持つ職業に勤み励み互に睦び和みつつ弥益々に世の人々の幸福を進めしめ給ひ子孫の八十続五十槻八桑枝の如く立栄へ仕奉らしめ給へと恐み恐みも白さく

平成十六年二月十九日　斎行

本殿遷座祭　祭典次第

当日早旦仮殿並びに本殿を装飾す
時刻　斎主以下祭員及び参列者仮殿所定の座に著く
　　是れより先手水の儀あり
次に　修祓
次に　斎主一拝
次に　斎主仮殿の御扉を開き畢りて所定の座に著く
次に　斎主祝詞を奏す
次に　祭員各其の位置に列立す
次に　斎主殿内に参入す
次に　遷御
　　其の儀斎主奉戴祭員前後陣に奉仕す
　　副庁長・総代会長は供奉す
　　他の参列者は本殿に移動す
次に　入御
　　著御に先立ち副斎主本殿の御扉を開く
次に　斎主御扉の側に候し祭員各其の位置に列立す
次に　祭員及び参列者所定の座に著く
次に　祭員神饌を供す
次に　斎主祝詞を奏す
次に　斎主玉串を奉りて拝礼
次に　参列員玉串を奉りて拝礼
次に　祭員神饌を撤す
次に　斎主御扉を閉じ畢りて所定の座に著く
次に　斎主一拝
次に　各退出

奉仕員

斎主	栃木県神社庁庁長	吉田　健彦
副斎主	栃木県神社庁祭式講師	提箸　克之
祭員	唐澤山神社禰宜	斎藤　兵衛
祭員	(宇)二荒山神社禰宜	柳田　文司
祭員	赤城神社宮司	早乙女昭司
祭員	今宮神社宮司	下妻　良夫
祭員	太平山神社権禰宜	阿部　康夫
祭員	乃木神社禰宜	渡　健二
祭員	大前神社禰宜	加藤　直人
祭員	(宇)二荒山神社権禰宜	上野　武男
祭員	(日)二荒山神社権禰宜	田原　経三
祭員	鹿島神社宮司	小幡　正之
祭員	(宇)二荒山神社権禰宜	佐藤　智則
伶人	古峯神社権禰宜	大河原　肇
伶人	古峯神社権禰宜	篠田　薫
伶人	古峯神社権禰宜	横山　榮
唐櫃所役	八雲神社禰宜	小堀　真洋
唐櫃所役	須賀神社禰宜	沼部　博成
絹垣所役	白鷺神社禰宜	上野　喜則
	温泉神社禰宜	人見　文治
松明(提灯)所役	塩竈神社宮司	伊藤　文雄
	根裂神社宮司	永田　弘幸
陰灯	岩崎神社宮司	田辺　一丸
	大田原神社宮司	宇賀神直人
	今宮神社権禰宜	福田　財大
筵道所役	(日)二荒山神社権禰宜	佐藤　洋誠
	(宇)二荒山神社権禰宜	金子　宗人
案内所役	静神社宮司	西山　政典
典儀	(日)二荒山神社権禰宜	斎藤　芳史
賛者	栃木県護国神社禰宜	稲　寿

栃木県神社庁本殿遷座祭　平成16年２月19日